



蓬萊町だより

第 七 号
昭和 59 年 1 月 30 日
蓬萊町 文 化 会 刊
昭 和 行 集 編 者

蓬萊町界限(その四)

旧制郁文館中学(上)

林 順 信

戦前蓬萊町で少年時代を過ごした者にとって、郁文館の運動場は、さして広場のなかった市内では、なかなか貴重な遊び場であった。昔の郁文館は、蓬萊町という町の中にあつて、戦争中の警備ということもあつてか、隣組の一員として、何をするにも町会と融け合つて、近所の子供の遊び場としても、比較的出入りが自由で、殊に、春、夏、冬の三つの休み中は、我々の絶好の遊び場であつた。

☆ 市内の名門中学校

そもそも郁文館の創立は、明治二十二年十一月十三日だから、今年で実に九十五周年を迎えることになる。春日局の墓所で知られる本郷の麟祥院に仮校舎を建てて、哲学館(東洋大学の前身)を創立した井上円了博士が、明治二十一年六月に外遊する際、後の郁文館の創立者棚橋一郎に、哲学館の留守番を頼んだ。井上円了博士は、中野に哲学堂を開いた哲学者で妖怪の研

究などでも著名である。明治二十二年、博士が帰朝後、蓬萊町二十八番地というから、今の校庭の北に続く家々のある土地に、新校舎を作つて湯島から移転して、哲学館が出来た。井上円了は、棚橋一郎に、私立中学をここに開校して、午前中は郁文館で、午後は哲学館で授業をふり分けて創始することをすすめたのが、そもそもの郁文館の第一歩であつた。

棚橋一郎は、文久二年十一月十三日(この日は、くしくも郁文館創立の日)に岐阜県に生まれた。父棚橋松邨は漢学者・詩人として知られ、母絢子は、女流教育家として活躍、芝三田に東京女学校を明治三十年に起こした。この東京女学校は、東京府内では、ミッション系ではなく、文部省認可の最初の私立女学校として発足した。だから、東京という字を上冠することができた。スカートに白線が一本入っていることは、都内随一で、現在でも三田に戸板女子専門学校と並んで建っている。この棚橋絢子女史は、昭和十四年秋に百一歳の長寿をまとうされ、郁文館でも学校葬が盛大に行われたのを想い出すのである。当時の百一歳は、全く稀有のことで、今日の平均寿命から考えれば百三十歳位になるのである。

棚橋一郎は、棚橋勝太郎現校長の父で、東京大学文学士であり、英語や国語に堪能で、イイストレイキと英和辞書を出したり、自ら国語辞

書を編集して、第一高等学校や府立一中や哲学館、陸軍幼年学校で教鞭をとつた。当時の東京は、官公立の中学といえば、学習院中等科と、府立一中(日比谷高校)しかなく、私立中学校では、杉浦重剛の日本中学、橋健三の東京開成中学、坂元盛徳の三田英語学校(錦城中学)の四校のみが、無試験で上級学校へ連絡できた。即ち、第一高等学校、高等商業学校(一ツ橋大学)、山口高等中学校、鹿児島造士館、東京美術学校(芸大)には、無試験で入学ができた。当時の授業は国・漢を除いては、英語はもとより、数学・理科などすべて英文の教科書で学んだから、幕末の洋学と同じであつた。

東京でさえもかくの如くであつたから、地方の各府県でも、県下の中学校は一枚か二枚で、従つて、どうせ下宿したり、寮に入るために自分の家を離れるならということ、いっそのこと、東京の郁文館などへ箆を負うて勉学に来たのであつた。従つて、勉学する意気込みがちがつていた。郁文館の寄宿舎は、西須賀町の聖テモテ教会の向かい辺にあつたという。

明治三十三年の郁文館中学卒業者の上級学校合格者は、左の如くである。熊本の五高が多いのは、当時九州から郁文館に入学した学生が多かつたからである。

- 一高 19名 仙台医専 1名
- 二高 4名 長崎医専 1名

三高	2名	東京外語	3名
四高	2名	札幌農学校	1名
五高	25名	大阪高工	2名
六高	1名	音楽学校	1名
七高	2名	海軍兵学校	1名
山口高	2名	士官候補生	1名
学習院	1名	私立諸学校	4名

当時の合格率の素晴らしさを物語っている。

卒業生の中には、柳田国男、大浜早大総長、内務大臣、文部大臣の潮恵之輔、警視總監長谷川久一、大審院長泉二新熊、司法大臣宮城長五郎を始め、杉田直樹医学博士や、宮本英脩法学博士、上村勝爾林学博士など数知れず、最近では、藤倉修アウンサー、俳優の大友柳太郎、菅原謙二、まんが家杉浦幸雄、推理作家梶龍雄など柔かい方でも多士済々である。

当時の郁文館のベースボールは都内でも最古参の一つで、近くの一高野球部（東大農学部にあった）と交歓試合を度々行い、一勝一敗という星勘定というから、かなりの高水準であった。郁文館の東の千駄木町に住んでいた夏目漱石が『我輩は猫である』の中で落雲館中学の野球のたまが飛び込んで来て怒るシーンが出て来るのは、郁文館の野球部のことで、この中には、東大梶原投手の父の梶原弥之助投手、押川清（春浪）投手をはじめ、ブント博士として知られた、銀座栗本運動具店主の栗本豊治などがいた。栗

本は当時いち早くバントを覚えた選手で、バントのことをブントといていた。当時の運動場は現在の運動場の北の方にあった。

☆ 二回の大火に遭う

明治時代の郁文館には、二度の大火があった。最初の大火は、明治二十九年十二月十三日、哲学館ともども凡てが灰燼と帰した。これに依り、蓬萊町二十八番地の南にある、旧有馬侯の下屋敷の土地（当時は三井で管理していた）七番地に校舎を新築移転した。哲学館は小石川原町に移り、その後、哲学館大学を経て東洋大学となった。私が出た京華中学は、郁文館の初代幹事の磯江潤が、明治三十年独立して開校した。第二回の大火は、明治四十二年十月二十日、この時も校舎五棟、雨天体操場、物置など三千坪が烏有と帰した。

この翌年四十三年四月に新築成った後の郁文館こそは、我々が昭和戦前に遊び回った校庭と校舎であった。現在正門となっているあたりはトタン塀で囲われ、正門は、現在、辻文房具店の前に一つ石の門柱が残っているところであった。そして、現在の正門の右側をば、蓬萊町の人々は「火事場」と称していたのは、多分第二回目の火事がすさまじかった時の名残りから出た呼び名であったろう。そこには、第二次大戦が勃発した頃、町内の非常用に井戸を掘って、特別に木戸を作って、我々七番地の者共が利用

した。この辺は高台で掘る時には大変苦労したが、水質はとても良かった。その火事場跡には、理化学実験室があった。このカギの手になったトタン塀の空地の様になったところには、区役所の工事用の材木などが置かれたり、市の清掃局がくみとりの桶を前日から積んであった。正門前のことはまた後日書くことになるが、東の角から、行岡洋服店（制服指定店）、大庭万年筆店（店の前にガチャーンというパチンコの元租があった）、宮下剣道具店、辻文房具店、斉藤印刷所、そして、西の角が松本洋服屋（制服指定店）があった。

正門を入ると、右手に、南京下見板張りの二階建て校舎がコの字型に建っていて、その次に中庭があって、雨天体操場があった。正門を入れて左側の現在ボイラーのある辺には、桜や楓の植込みが続いて、その中央に二宮尊徳の銅像があった。正門から突き当たりの柔道場までは、ざらーっと南北に続いた広い道で、ここが絶好の風揚げの場所でもあった。

右手の旧校舎は、浅黄色というか、薄いブルーのペンキが塗ってあり、下の地ぎょう廻しには大谷石が使ってあった。ところどころに通風の空気ぬけがあって、天地左右とも二十五センチ程の四角い穴があった。そこには、からだの細い我々の子どもが忍び込み、真暗い縁の下を這い廻って出て来ると、ポケットや両手に、

庭球用や野球用のボールを幾つも持って出て来ては、我々の拍手喝采を浴びたのはよかったが、何せ真暗い縁の下のこと、顔から頭までくもの巣だらけにして這い出て来るのだから苦勞様であった。この様な南京下見張りの校舎は、昔の市内の小学校や、日本医大の昔の建物もそうであったが、現在では残存が少なく、昭和二十年三月十日の大空襲で焼失してしまったのは惜しまれる。その時、井戸も埋まってしまった。

☆ 新校舎のことなど

その旧校舎はコの字型になって中庭があった。学校の事務室や、職員室など中枢機関はすべてこの右の中央の入口を入った奥の方であった。「おりまヒンヒン」とニックネームのある、榎橋勝太郎現校長や、ナポレオンこと数学の鳥居良一郎先正（私の伯父の試之の同級生で京華の先輩）が、その出入口からパイプ片手に出て来られたのを昨日の様に想い出すことができる。おふた方とも西歐風の貴公子で特に印象深い。

その旧校舎の北に雨天体操場があって、そこでは、剣道の練習と、プラスチックの練習が放課後行われていた。行進曲にまじって、フーガやワルツなども演奏されていた。我々蓬萊町の子供達は、早く中学校に入ってラッパを吹きたいと思うのであった。プラスチックは陸軍の教官が、恐らく配属将校の教官が指揮棒を振っていたと思う。

郁文館敷地の最西北のところには、柔道部の平屋建ての大きな道場があって、岩崎先生が指導して居られた。畳敷き八十畳敷き位であったろうか、わざとねだをゆるめて、はずむ様に出ていたが、若者の汗で、いつも甘ずっぱい匂いがした。郁文館の柔道は東京でも強い方で、日大一中などと定期戦をやっていて、我々子供たちもそばで観戦出来た。旧制中学時代、三段の選手が二、三名いたのだから強い学校であったと思う。この柔道場の北の裏に、やっと子供が一人通れる程の狭い通路があって、我々はそこを秘密の出入口として拵えてあったので、小使さんの「南京豆」とあだ名されたおじさんが気嫌の悪い時には、そこから郁文館に出入りしていた。この「南京豆」は、その後、東大農学部の小使さんになったが、頭が丸坊主で、まるで南京豆の様にトンガリ頭なのでそう呼ばれていた。

現在も校庭の南側にある鉄筋コンクリートは、昭和十一年十月四日に新築されたのである。昭和十二年には日中戦争が勃発し、この新校舎で、慰問袋の整理を、蓬萊町の国防婦人会で行ったことを想い出す方々も居られることであろう。当時郁文館では、事務長の二之宮英雄先生が町会との接触の任に当たられていた。二之宮先生は、ひげのある巨漢であったが、よく町会の人と話し合いをされた。戦時中は率先して国防色

の国民服を着ていた。

また、新校舎前の校庭で、防空演習を行い、約四畳半位の模擬家屋に火を点じて、火事の状態をこしらえて、消火の訓練をした。バケツリレーや、はたきを水でぬらしての消火作業では、その後の実際の空襲には一つも通用するものではなかった。（つづく）

町会活動の概要

昭和58年10月～59年1月まで（4か月間）

総務部

10/18 文京区長を囲んでの懇談会 向丘出張所 午後七時～九時まで

11/1 辻英雄氏（元蓬萊町会副会長）

昨年の秋に栄誉ある黄綬褒章を受章されました。心よりお慶びを申し上げます。

11/16 ごみ減量運動推進委員会 本郷清掃協力会に於て

防火部

11/13 防災リーダー講習会 文京第六中学校に於て

11/23 昭和58年度防災訓練コンクール 文京第六中学校に於て

文京地区各町会・自治会三四組がコンクールに

(4) 出場、当町会は第三位に入賞しました。

防犯部

秋の全国防犯運動旬間 10/11~10/20まで
10/7 防犯運動推進会議 駒込警察署に於て

／ 防災運動普及パレード 防犯部・婦人部参加

交通部

秋の全国交通安全運動
この旬間中は、交通部が街頭にて、交通安全の普及に努めました。

婦人部

10/12 三宅島の噴火災害に対し、日赤文京支部を通じて、婦人部から義援金、式拾万円を贈りました。この金円は、日ごろ町内の皆様にご協力を頂いている廃品回収事業の積立金を支出したものです。

11月 共同募金 拾四万一千六百円也
12月 歳末たすけ合い募金 拾五万一千三百四拾式円

青年部

歳末夜警 12/18~12/29 12日間
青年部が主力に町会役員も加って連日夜警巡回を実施いたしました。

文化部

町会員のご家庭で本年成人を迎えられた方は、左記にお名前をのせて頂きました。
まことにおめでとうございます。当町会から新成人となられた方々に心ばかりの祝品をお贈りいたしました。

記

- | | | |
|--------|--------|--------|
| 生田目和巳様 | 小山 雅子様 | 高橋多花子様 |
| 成澤 秀美様 | 小池 裕様 | 藤田 潤子様 |
| 小泉由里子様 | 川村 紀子様 | 藤井 薫様 |
| 浜出 健司様 | 高橋 啓子様 | 倉田圭一郎様 |
| 青柳 辰喜様 | 池澤 達也様 | 加藤 元信様 |
| 福島 久雄様 | 渋谷 潤一様 | 服部 珠子様 |
| 田中 良治様 | 木村しげみ様 | |

蓬萊川柳

お年玉孫沢山に困る春 長谷川藤七郎

— 今年又二人増えたと知らせあり—
正月を良い事にして飲むお酒

— 気兼ねも入らぬ初春の酒—
地主から価上げの話春寒し

— 食ふ寝る処に住むところ—
着飾りし孫に見るや祖父と祖母 竹中 一馬

雲水の読経も泌みる底の冷え
散歩して息きる露地の花ハツ手 喜一

青だたみ踏む足裏の師走かな 広明
連木

蓬萊俳壇

初句会 (59・1・19)

天 初句会天井高き大書院 喜一
地 丈高い吾る従えて初詣 広明
人 初西燦然として朝熊山 笑子
賀状手になつかしき顔目に浮ぶ 松男
車にも無事を祈りて輪飾りす スエ
役を退く心支度の師走かな 千重
正月や掛軸かえて端坐せり 重雨
寝もやらで溢る涙や寒の月 広子
初芝居まき手拭いもはなだ色 連木
一月の句を書きとむる墨淡し 雨亭

蓬萊句会二月は、二月二十三日(木)六時半より海蔵寺に於て開きます。当日会費五百円、参加自由、兼題は「針供養」出句三句、ふるってご参加下さい。

訃報

当町会にお住いの方で、9月下旬から1月までの間に逝去された方々のご氏名は左記のとおりでございます。謹んで弔意を申し上げ、ご冥福をお祈りいたします。

藤井又一様 佐藤アヤ様 加藤勇様

編集部

すこやかな新年を迎え、まことにお目出度うございます。本年も町会員の皆様方への連絡と親睦の一助として本誌の充実を図ってまいりませう、どうぞご愛読下さい。

編集委員 小林音吉、竹中一馬、猪熊良晃、

高橋一郎、翁 松夫、池田 暉

*次回の発行は5月を予定しております。